

ま え が き

ヤスパースは「本来的に人間存在は決断する存在である」といっている。本来的な人間存在は自我が決断する時与えられるものである。だから人間は本来的に自主的である。私は前紀要においてこのことを「人間の健康な精神は、もともとそれが行動に発現する時に、その行動は自主的である」と表現しておいた。ところで決断するためには自由と自己信頼感が必要不可欠である。何故なら自我に対する全ての脅威から自由な時（……からの自由）始めて自由な決断（……へ向っての自由）が可能となる。また、決断は自己の体験に基づいてなされるものなる故に信頼感を必要とする。しかし、現実のわれわれの生活の中では非自主的な行動が非常に多い。それは現実には自我の決断に対する障害が多く存在するからである。それら障害が人間から自由を奪い、人間の自己信頼感を麻痺させているからである。そしてそれら障害の一つに「枠」がある。枠を与えられたものは、その枠を自分自身の本来的なものと思ひ込み、その枠を通してものを見、考え判断し、感じている。そこでは何の拘束も感ぜず、自由であるかの如く錯覚している。だからそれが真実であり、自分の考え、自分の判断、自分の感じであると思っている。それを自主的なものと思っている。かかる経験が累積される時、そこに見掛けの自我が形成される。この見掛けの自我が本来的な人間存在の自然な発現を阻止しているのである。しかも日常生活の中で主として活動しているのはこの見掛けの自我であって常にこの見掛けの自我の成長を目標に行動している。この成長を妨げる経験が現われると、自我は脅威を感じ不安を経験する。すなわち、見掛けの自我と本来的な人間存在とが衝突する時、脅威や不安が生ずる。自己信頼感が麻痺し、自由が失われる。

かくて自主的な人間であるためには、まず、本来的な人間存在を自覚せねばならぬ。自由をとりもどさねばならぬ。自己信頼感を自覚まさねばならぬ。そのためには、見掛けの自我の正体を見ぬかねばならぬ。そこでわれわれは一体どうあればよいのか、学習指導にあたってどうあらねばならぬか。これがわれわれの課題である。

自主的な人間であるための最大の障害が実はこの見掛けの自我にあるとみた。ところが、われわれ教師は案外その見掛けの自我を作らせるようにしているのではないか。枠を生徒に強制しているのではないだろうか。まずわれわれは枠の押しつけを止めることから始めねばならぬ。しかし、一方では枠もまた必要なこともある。この矛盾をどう解決すればよいのか。その一つの方法は、枠を枠と知った上で生徒が受け取るように与えるということである。生徒が与えられた枠をあたかも自分自身のものであるかの如く受け取る時、それが見掛けの自我を形成する。しかしそれを枠と知って受け取る時、それは本来的な人間存在の成長のための資料となる。そのために教師の姿勢は如何にあるべきか。

まず生徒を信頼することである。生徒は教師が教えてやらねば何もできぬようなものではない。彼等は彼等なりに自分の力で成長し得るものであることを教師はまず認識し、生徒を信頼すべきである。というのは教師の指導に、生徒に対する不信感の上に立ち、教師自身の欲求満足のために教えているかの如き感じを持つからである。教師は自分の持つ結論を生徒に与えることによりまた、生徒の誤りを教師自身の規準によって訂正することによって、自己の欲求を満足させているのではないかとこの感じを持つからである。（勿論そのようなことは、教師自身は意識していないであろう）そうした場で生徒は、教師の示した結論に従うことが、自分のものを捨てて、教師の訂正に従うことが、よりよき人間に成長するための唯一の道であるかの如く思ひ込み、その唯

一の道にはずれることに強い脅威を感じ、ために教師から与えられたものを本物の自分のものであるかの如く錯覚するのである。教師は教えてやろうとの善意（教師の意識しているものはこれである）の中に実は最大の障害のしるひ込む隙のあることを知らねばならぬ。かくて教師は結論を強制し、訂正を強要することをさしひかえねばならぬ。生徒に自由に「やらせる・考えさせる感じさせる・言わせる」ことが必要である。それが正しいと思うことであれ、誤りと思うことであれ。だが「自由に……させる」ということはそう簡単なことではない。教師の奨励（自由にしなさい）許可（何を言ってもいいんだよ）によって生徒は自由になり得るものではない。生徒を自由にさせる鍵は、教師の許容的な態度、受容的な姿勢の中にのみある。教師のかかる態度姿勢のかもしれない気においてのみ、生徒は自由を感じ得るのである。そこでは生徒は如何なることを考えようと、感じようと、発言しようと、そのたびに脅威を感じることはない。そこで生徒は自分の持っている与えられた枠の本性を知り、見掛けの自我の正体を見ぬき、本来的な自分の姿に接することができる。そこで生徒は自分のできること、できないことを知り、長所短所のすべてを自分のものとして受容する。そこに自己責任感に裏打ちされた自己信頼感が成長してくる。かかる生徒は自己の体験を基準にして自信をもって生活を律していく。当然その生活には責任が持たれている。かかる生活こそ真に自主的な生活である。かかる学習こそ真に自主的な学習である。かかる生徒こそ真に自主的な生徒である。

かくて自主的な生徒への成長は上述の如く、彼等自身の力で、許容的な自由なふんい気、共感的な受容的な人間関係の中で、彼等自らの行動を通してのみ果たし得るのである。従ってそのための教師の営みは、かかるふんい気、人間関係を提供することであり、その具体的な方法は、しかし具体的な場に即して生み出されるべきものである。従って学習指導の場における教師の営みも同様一律のものであってはならず、教師により、教科により、その時により最もよい方法が教師自身によって作り出されていくべきものと思う。本校の学習指導のあり方が各教師により更にその時々により異なるのはその意味においてである。

私たちは「一切の教育は学習である。最も効果的な学習は自主的なものである。自主的な学習は責任を与えられた時に生れる」との信条のもとに、「最も優れた学習指導は、最も多くの知識を授けることではなくて、最も多くの学習に対する責任を感じさせることである」と考え、その方法を実践的に追求しているのが現在の私たちの姿である。

大方の御教示御批判を賜われれば幸甚に存じます。